慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	まちづくりと「出会い」： 千葉県松戸市のボランタリー・アソシエーションを事例として
Sub Title	Encounters in town planning situations: a case study of the voluntary association in Matsudo city of Chiba prefecture
Author	山田, 賢司(Yamada, Kenji)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2010
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.70 (2010.) ,p.1- 13
JaLC DOI	
Abstract	In Japan, town planning is often called "Machizukuri." Machizukuri usually refers to activities involving the cooperation of citizens living in a local area or the cooperation of citizens and government in order to solve problems in community life and to create comfortable living for the area. This means Machizukuri focuses on "the common value" because it strives to create better living in the local community, which is common to almost all citizens. Activities for Machizukuri are evaluated based on the possibilities of realization of the common value. It is, however, very difficult for activities to realize the common value because there are very different notions among people about the problems of community life and comfortable living. Voluntary activities for Machizukuri must make their participants have a good time or comfortable through interactions with other participants, regardless of realization of the common value. Therefore, we have to consider the realistic possibilities of Machizukuri activities through analyses of situations in which the activities generate "personal value" such as fun or feelings of comfort. This article redefines Machizukuri as working to make the community a better place, and considers the concept which Erving Goffman (1961) called an "encounter" (a focused gathering which causes face-to-face interaction) in order to explain the concept of "personal value." It describes encounters in Machizukuri situations through a case study of the voluntary association, "Tokiwadaira Chiiki Kasseitai" in Matsudo city of Chiba prefecture.
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000070-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

まちづくりと「出会い」

――千葉県松戸市のボランタリー・アソシエーションを事例として――

Encounters in Town Planning Situations

—A Case Study of the Voluntary Association in Matsudo City of Chiba Prefecture—

山　田　賢　司*
Kenji Yamada

In Japan, town planning is often called "Machizukuri." Machizukuri usually refers to activities involving the cooperation of citizens living in a local area or the cooperation of citizens and government in order to solve problems in community life and to create comfortable living for the area. This means Machizukuri focuses on "the common value" because it strives to create better living in the local community, which is common to almost all citizens. Activities for Machizukuri are evaluated based on the possibilities of realization of the common value.

It is, however, very difficult for activities to realize the common value because there are very different notions among people about the problems of community life and comfortable living. Voluntary activities for Machizukuri must make their participants have a good time or comfortable through interactions with other participants, regardless of realization of the common value. Therefore, we have to consider the realistic possibilities of Machizukuri activities through analyses of situations in which the activities generate "personal value" such as fun or feelings of comfort.

This article redefines Machizukuri as working to make the community a better place, and considers the concept which Erving Goffman (1961) called an "encounter" (a focused gathering which causes face-to-face interaction) in order to explain the concept of "personal value." It describes encounters in Machizukuri situations through a case study of the voluntary association, "Tokiwadaira Chiiki Kasseitai" in Matsudo city of Chiba prefecture.

1.　まちづくりをめぐる「公約的価値」と「個人的価値」

近年，まちづくりを志向するNPOやボランタリー・アソシエーションなどの団体が増加する傾向にあるといわれている。日本において，平仮名表記の「まちづくり」という言葉が広く使われるようになったのは1970年代後半からである（延藤，1990: 9）。このことばは，国家主導の官治的都市計画に対

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程単位取得（地域社会学）

して，市民主導の都市計画を提唱するなかから生み出されてきた。加えてまちづくりには，これまでの都市計画が物理計画を意味していたのに対し，市民や計画担当者の組織といったソフト面の強調という側面を持っている。こうした経緯から，「まちづくり」という言葉のなかには大抵，「市民相互の協力や，市民と行政との協働などを通して特定の地域における生活上の課題を解決し，住みよい地域社会を形成すること」という意味が含まれている[1)]。こうした意味合いは，個人ではなく地域における共通の生活課題の解決をめざしている点で，また，そのために様々な立場の行為者の参加を想定している点で，市民に共通する「公約的価値」[2)] に焦点を当てた定義だといえる。そして，実際に行われているまちづくりの活動は，こうした「公約的価値」を実現しうるかどうかに基づいて評価されることになる。

しかし，実際のまちづくりが「公約的価値」を実現することができるかどうかは定かではない。現実の地域社会において，考え方や属性の異なる多様な市民が住んでいることを考慮するならば，「公約的価値」の実現はむしろ，非常に困難であることが予想される。

ところで，まちづくりは，町内会・自治会のようなフォーマルな活動ないしは半強制的な活動を除けば，基本的に個々人が自発的に参加することによってはじめて成立する。そして，個々人が継続的に活動に参加するためには，活動の場における相互行為を通じて，彼らが「楽しさ」や「居心地のよさ」といった積極的な意義を見出す必要があるだろう。したがって，まちづくりの研究においては，実際の活動において，こうした「楽しさ」とか「居心地のよさ」などといった「個人的価値」が，どのような条件や契機のもとに生起し継続しているのか，また「個人的価値」の内容が具体的にどのようなものなのかといった点を解明することで，まちづくりの現実的な意義や可能性を見出すことが必要となるのである。

そこで本稿では，まちづくりについて，「特定の地域に対して，何らかの『良い』と思われる働きかけをすること」と緩めの定義をした上で，千葉県松戸市常盤平のボランタリー・アソシエーション「常盤平地域活性隊」の活動の事例をもとに，前述の「個人的価値」の内容を検討することにしたい。その際，「楽しさ」とか「居心地のよさ」を把握するための概念的枠組みとして，アーヴィング・ゴッフマン（Goffman, 1961=1985）の「出会い」という対面的相互行為（face-to-face interaction）の概念を用いることにする。というのも，まちづくりにおいては通常，活動に何らかの関心をもつ個々人が日頃の所属を離れて集まり，イベントの運営や会議などの形で相互行為を行っている。そして，「個人的価値」は，まちづくりに関わる個人間の直接的，対面的な相互行為の場面を通じて生起・維持（あるいは消滅）するものと考えられるからである。

なお本稿では，具体的に次の課題を設定する。まず第一に，ゴッフマンの「出会い」概念を取り上げ，この概念とまちづくりとの関連について検討を行う（第2章）。第二に，「常盤平地域活性隊」の事例を取り上げ，この活動においてどのような「出会い」が生起しているのかについて記述を行う（第3章，第4章）。そして第三に，先の課題の結果を踏まえて，新たにどのような研究課題が成立するのかについて考察を行うことにする（第5章）。

2.　ゴッフマンの「出会い」概念とまちづくり

2.1　「出会い」の定義

ゴッフマンは，「直接的に居合わせているふたり以上の集合」（Goffman, 1963=1980: 20）のことを「集まり（gathering）」と呼んでいる。なお，この集まりの場面においては，多くの場合，対面的相互行為

が生起することになる。ゴッフマンは，この対面的相互行為のうち，人びとが互いに他の人の前に居ることだけで引き起こされる，対人的コミュニケーションから構成される相互行為で，例えば，部屋ですれちがう時，二人の見知らぬ人たちが，互いに相手の服装，姿勢，一般的なマナーをチェックし，それぞれが自分自身も観察されているので自分の振舞いを修正するときに起こるような相互行為を，「焦点の定まらない相互行為（unfocused interaction）」と呼んでいる。一方，会話，卓上のゲーム，あるいは参加者の緊密な対面的サークルによって保たれている共同作業などにおいて一時のあいだ，認知的および視覚的注目を単一の焦点に向ける人びとが，その持続を事実上同意するときに成立する対面的相互行為のことを，「焦点の定まった相互行為（focused interaction）」と呼んでいる。そして，焦点の定まった相互行為が生起する集まりのことを，「焦点の定まった集まり（focused gathering）」ないしは，「出会い（encounter）」，またあるいは，「状況に関わりのある活動システム（situated activity system）」と定義している（Goffman, 1961=1985: i–ii）。

この「出会い」においては，「無関係ルール（rule of irrelevance）」と「変形ルール（transformation rule）」が存在する。無関係のルールは，一言でいえば，特定の感情や話題など，出会いの場面においては表出すべきではないとされる事柄についてのルールだといえる。変形ルールは，出会いのなかで，出会いの外部の世界における諸属性を，いかに修正して表現するのかに関するルールだといえる。これらのルールによって，外部世界と出会いのあいだに境界が生まれ，出会いの独自の世界，リアリティを構築することになる。したがって，「出会いのダイナミックスは，より広い世界から出会いを選択的に切り離す環境－維持のメカニズムの機能と結び付けられている」（Goffman, 1961=1985: 63）ということになる。

そして，こうした無関係のルールなり変形ルールなりによってつくられた世界と，参加者が自発的関与の対象として想定している世界が一致するならば，参加者個々人はユーフォリア（euphoria: 多幸状態）ないしは気楽さ（居心地のよさ）を感じることができる。逆に，両者のあいだの距離が開いたならば，個々人のディスフォリア（dysphoria）や緊張につながることになる。

出会いの世界は，外部のより大きな社会の複製された世界でもそのミクロコスモスでもなく，われわれという一体感のもとに固有の枠が設定される世界なのである（佐藤，1985: 212）。次に，こうした「出会い」の概念と，まちづくりの活動がどう関わるのかについて，考察を行うことにする。

2.2　まちづくりにおける「出会い」

まず始めに指摘しておかなければならないことは，「出会い＝社会集団，組織」ではないということである。出会いと社会集団の最も大きな違いは，「ほとんどの集団は，成員が身体的に一緒にいる場面から離れたところでも存在し続ける」のに対し，出会いの場合は，「たとえ，将来の会合で同じパターンの相互行為や同じ参加者が現れたとしても，特定の出会いはそこで終わり」ということである（Goffman, 1961=1985: vi–vii）。つまり，集団の場合は，成員の役割やリーダーシップの構造，規則などが多少なりとも制度化された形で存在していて，しかもそれらは成員が特定の場にいるかどうかに関わりなく存在しているのに対し，出会いは，特定の場面で参加者が何らかの焦点の定まった対面的相互行為をする際に成立するものであり，それが終われば消滅するものだということである。したがって，出会いとは，ある特質を備えた状況であるのに対し，集団・組織は，特定の状況に関わりなく存在する制度的な形式だということになる。

このことを踏まえてまちづくりをみるならば，まず，まちづくりを行っているボランタリー・アソシエーションやNPOなどの組織は「出会い」ではないということになる。まちづくりにおける「出会い」というのは，活動組織が主催して行う会合やイベントなど，組織の成員や地域のボランティアなどが集まって行う話し合いや共同作業の場面において生起する状況だということになる。そこで次に，実際にまちづくり活動を行っているボランタリー・アソシエーションの事例を取り上げ，そこで「出会い」がどのような形で生起しているのかを記述し，その上で，まちづくりを「出会い」生起の場としてみた場合に，どのような研究課題が成り立つのについて考察することにしたい。

3.　まちづくり（千葉県松戸市常盤平の「常盤平地域活性隊」）の事例[3)]

3.1　松戸市常盤平および常盤平団地の概要

千葉県松戸市は，東京都心部から北東方向におよそ20 km離れた位置にある，首都圏のベッドタウン的な機能を有する都市である。人口は，市の統計によると，2010年1月1日現在で490,095人（男246,440人，女243,655人），世帯数は219,573世帯である。松戸市の人口は，千葉県のなかでは千葉市，船橋市に次いで3番目に多い。

松戸市常盤平は，松戸市内では中東部の位置にあたり，松戸駅からは私鉄の電車でおよそ10分かかる。ちなみに，常盤平という地名は，団地が造成された1950年代に公募で決められたものである。なお，松戸市の統計によると，2010年1月1日現在の常盤平1丁目～7丁目の人口は24,090人（男11,974人，女12,116人），世帯数は12,164世帯で，そのうち，常盤平団地の人口は8,328人（男4,109人，女4,219人），世帯数は5,201世帯である。

常盤平団地は，1955年に設立された日本住宅公団（現在の都市再生機構＝UR。以下，公団あるいはUR）によって，当時の松戸市金ヶ作地区にて開発がなされ，1960年に入居が開始された[4)]。この団地は，高度成長期の首都圏での人口増加に対応してつくられた公団団地のなかでも，初期のものに当たる。なお，この団地の部屋はすべて，分譲ではなく賃貸である。

常盤平団地では，1962年に「常盤平団地自治会」が結成された（結成当時は，約3,000戸が参加）。団地自治会は非常に行動力があり，かつて，家賃値上げ反対運動や建て替え反対運動といった住民運動を強力に推し進めてきた実績がある[5)]。しかも，これらの運動は実を結んだようであり，松戸市内の他の賃貸物件と比べて，常盤平団地の家賃は驚くほど安い。また，おそらくは建て替え反対運動の成果だと思われるが，URは昭和30年代に建てられた団地を建て替える，あるいは土地を売却する方針であるにもかかわらず，常盤平団地だけは唯一，建て替えを行わない（ストックを活用する）方針のようである[6)]。したがって，常盤平団地の景観は，現在でも1960年代当時とほとんど変わっていない。一方，自治会では近年，高齢者住民の「孤独死ゼロ作戦」を行っており，これはマスコミにも取り上げられて話題になっている。しかし，こうした住民運動は強力であった分だけ，自治会は各方面に敵をつくってきたともいえる。

ところで，常盤平2丁目には団地の中央広場（通称　しあわせ広場）があり，この広場を取り囲むように「常盤平中央商店街」という商店会（加盟店舗数は10店舗あまり）の店舗やスーパーマーケットの建物がある。後で説明する「常盤平地域活性隊」（以下，活性隊）の「隊長」M氏は，ここでパソコンの修理や相談を受けつける店を開き，2006年から営業している。活性隊の事務局は，このM氏の店舗にある。

3.2 常盤平地域活性隊の活動内容

活性隊は，2007年の春に結成されたボランタリー・アソシエーションであり，音楽やアートのイベントなどを通じて，「老朽化」，「孤独死」など常盤平につきまとっている暗いイメージを払拭して地域の賑わいを取り戻し，活性化させることを目的に活動している。活性隊は，2007年5月より毎月1回，おおよそ第2土曜日に，「トキサイ」（常盤平祭りの略）という，しあわせ広場と「サテライトスペース」と呼ばれる商店街の空き店舗を使った音楽とアートのイベントを開催している。

「トキサイ」には，1回ごとに複数の音楽バンド（ジャズ，ロック，懐メロなど）の演奏や，パフォーマンスを行うグループ（マジック，フラメンコ，ダンスなど）の公演があり，昼前から夕方くらいにかけて行っている。なお，出演者の多くは，松戸在住か，あるいは松戸に何らかの縁のある人たちである。彼らのなかには，金銭的な収入を得られるほどのプロフェッショナルな人もいるが，それでも無報酬で出演している。後でまた紹介する「活性隊」の「副隊長」T氏は，これらの出演者，特にミュージシャンとのつながりがあり，彼らに出演を依頼する音楽担当の役割を引き受けている。また，彼自身も「トキサイ」ではドラムを叩いている。一方，「トキサイ」ではこのほかに，フリーマーケットや，焼きそば，手作り豆腐などの模擬店も出されている。これらの模擬店は，障害者の授産施設など，松戸市内で市民活動を行っている団体からの出店もある。なお，活性隊には，T氏の他に，E氏という副隊長もいる。彼は，「トキサイ」で，野外ステージなどのセットの準備や，後片づけなどを担当している。したがって活性隊は，隊長のM氏（1954年生まれ，男性），副隊長のE氏（1955年生まれ，男性），そして，同じく副隊長のT氏（1956年生まれ，男性）がキー・パーソンとなっている[7]。

活性隊では，週に1回，金曜日に「定例会」を開いている。この会は基本的に，「トキサイ」などのイベントの打ち合わせや，関係者相互の交流の場になっている。ここでは隊長のM氏や副隊長のE氏がムードメーカーになっている。ちなみにこの会は，参加者が飲んで自由におしゃべりするという意味で楽しい雰囲気が演出されており，“会議”なのか“飲み会”なのか境界線がはっきりしない状況になっている[8]。

ちなみに，活性隊で，日常的に「トキサイ」の運営や準備・後片づけを手伝い，定例会にもよく参加している「隊員」は，おおよそ20人ぐらいいる。

3.3 常盤平地域活性隊が結成された経緯[9]

活性隊が結成される前年の2006年，松戸でのまちづくりを積極的に進めているE氏は，常盤平という地域に目を付け，しあわせ広場にて「常盤平二丁目の夕日」というイベントを7月に開いた。なお，このイベントでは，以前この場所にあった街頭テレビが再現された。この街頭テレビには，常盤平団地建設前の金ヶ作地区の様子や，昭和30年代に公団がつくった常盤平団地のPR映像などが映し出された。

「常盤平二丁目の夕日」の後，E氏は常盤平の商店会や団地自治会，一般市民が集まって協働のまちづくりを進めるための勉強会を開くことを企図していたが，この当時，彼は多忙で，それができない状態でいた。そうしているうちに，団地自治会と非常に密接な関係にある地区社会福祉協議会が，中央商店街の空き店舗に，「いきいきサロン」という，独居の高齢者などが集まることのできる溜まり場的なスペースをオープンさせた。この施設は，自治会外部に対してほぼ秘密裏といってよい状態で準備が進められた。これに対し，中央商店街の店主達は危機感を抱くこととなった（住民運動の影響もあって，

団地自治会は，この地域のなかで突出した存在になっているという)。そして，これがきっかけで，商店会の会長補佐になったM氏ら数人の商店主は，相談のために，「常盤平二丁目の夕日」を企画したE氏のもとを訪ねた。そこで，「勉強会を開きながら町で何かをやれる組織を作ろう」という話になった。これは2007年早春の話で，この時に「常盤平地域活性隊」という名称も生まれた。また，同時に，活性隊では音楽とアートを中心としたイベントを開くことも決められた。そこで，音楽担当の人材として，常盤平で設計事務所を開き，また夫婦で音楽活動もしているT氏がスカウトされた。

4.　常盤平地域活性隊のなかの「出会い」

ここでは，隊長M氏の発言と，副隊長T氏の発言をもとに，彼らが活性隊においてユーフォリアを感じている対面的相互行為としての「出会い」を抽出することにしたい。

4.1　「隊長」M氏の語りからみえてくる「出会い」

M氏は，活性隊の活動をするにあたって，何よりもまず，「楽しい」ことを重視している。筆者は2008年3月18日に，M氏が活性隊の活動を行う動機を中心に聞き取り調査を行ったが，その際，M氏の口からは，「協働」や「コミュニティ形成」など，研究者や専門家が考えるような意味合いでのまちづくりの理念に関わる話は一切出てこなかった。M氏はむしろ，仕事などの日常的な所属を離れて地域の人たちが集まり，コミュニケーションを楽しむことに活性隊のまちづくりの意義を見出しているようである。筆者が，「活性隊のなかには，『トキサイ』には参加しないけど，定例会ではご飯をつくってくる人もいたりして面白い」という主旨の発言をした際に，M氏は，次のようなコメントを残している。

> M：そうですよね。あの，まあね，本当にみんながやりたいことをやってっていうことなんだけど，そういう場がないんだろうね。今，この世の中で。だんだんと，みんなが集まって，わいわいやれるって言う，まあやるんだけど，いつも，男だったら仕事場とくっついているとか，なかなか友だち関係でやるっていうのはないんじゃないかな。

M氏は，みんなで集まってわいわいやることの意義について話している。この話の後，筆者とM氏のあいだで，次のようなやり取りがあった。

> I（インタビュアー：筆者)：うーん。確かに，地域を拠点にして活動するってないですよね。〈M：そうですよね〉。まあ，町内会とかもありはするけれど，あまりにも形式張った形の場になっちゃてるから，何か「楽しく」という感じでもなくなっているのかなあって気もしますし。
>
> M：そういう意味で，会って言うのはなかなか，意味があるのかなあと思ったりして。
>
> I：ええ。その点については他の方からもインタビューでお聞きできればいいのかなあと思いますが。

M：俺たちも何て返事していいのかよく分からない。すみません，返事になってないですけど，まああの，みんなで集まってもらって，みんなでコミュニケーションをしてって，まあ楽しいから，それでいいんじゃないのっていうの。昔から僕はね，宴会が好きなの。だから，よくアメリカでも人がいっぱい集まって，いつもやってた。

このような話の内容から，M氏は活性隊の活動に関して，地域の仲間同士が集まり，コミュニケーションをとることそのものに価値を見出していることが分かる。G. ジンメル（Simmel, 1917=1966; 1979; 2004）は，個別の衝動や目的などといった相互行為の内容を取り払った後に残る，遊戯的で自己目的的な，形式そのものを求める相互行為のことを「社交」と呼んでいるが，M氏のこの意味づけは，社交の考え方に近いものだといえる。そして「社交」は，二人以上の個人が集まって，話題や場面設定などが行為者のあいだで共通に認識された上で行う相互行為である。ゆえに，社交は「出会い」の一種であるとみることができる。したがってM氏は，活性隊の活動の，「社交」としての「出会い」の側面にとくに価値を見出していることが分かる。

4.2 「副隊長」T氏の語りからみえてくる「出会い」

一方，T氏は活性隊の活動の中で，音楽のバンド演奏とその準備，そしてこれらの活動を通じた他のミュージシャンなどとの交流に意義を見出している。2008年3月18日に行ったT氏およびT氏の奥様対象の聞き取り調査において，T氏夫妻は，最初に活性隊への参加の依頼があったとき，「最初はちょっと，遠巻きにみていた」という話をしている。というのも，以前の青年会議所時代に「極端な話，半年仕事しないでもうそれにどっぷりつかって，残りの半年で仕事してどうにかつないで…」と表現されるほどの忙しさに見舞われ，「寝る時間割いて」活動していた経験があったためである。しかし，活性隊に参加して，自ら「トキサイ」のステージで演奏し，ステージで演奏するミュージシャンを探し，彼らと交渉したりしているうちに，この活動に大いに楽しみを見出すようになってきている。

T：こういうイベントをやると，で，音楽担当してると，他でも同じことやってる人たちはどこでやってるかって情報が入ってくるんですよね。それにミュージシャンを通じてもそうですし，主催者も実際にかぎつけてここに来るんですよね。もうなかでこう，まわるんですよね，同じようなレベルで。で，もうちょっとレベルアップしたいと思ったら，またその周りにいっぱいいるので，で，そういう人たちに声かけるといいっていうのが，見えてくるんですよね。自分たちのイベントが，客観的にみることができてくる，っていうのがあるんですね。たった1年なんですけど，すごく，そういう面が垣間見れるんで，楽しんでますね。

この語りはすなわち，「トキサイ」の音楽担当の活動をするにつれて，他のミュージシャンやライブ主催者とのコミュニケーションをとる機会が増え，他のミュージシャンやイベントの音楽のレベルと，自分たちのレベルが何となく分かるようになって面白さを感じているということである。

そしてT氏は，

T:「トキサイ」がもしなくなっても，同じようなことをやるかもしれないですね。もう火がついちゃったんで，多分止められないですね。

とも話している。つまり，「トキサイ」の音楽担当をするうちにこの活動が楽しくなり，もし「トキサイ」がなくなったとしても，どこかで同じような活動を続けたいと思うくらいにのめり込んでいるということである。

T氏が活性隊にて行っている上記の活動のなかで，バンド演奏は，一緒にステージに上がった他のミュージシャンとの共同作業であり，「焦点の定まった相互行為」であることがいえる。また，他のミュージシャンや音楽イベント関係者とのコミュニケーションも，「音楽」あるいは「音楽イベント」という共通の認知的焦点をともなった相互行為であり，T氏にとっては，例えば仕事など，他の日常生活上の相互行為とは異なる内容の相互行為である。このように考えると，T氏が活性隊（トキサイ）のなかで行っている活動の多くは，「出会い」に相当する相互行為だということがいえる。そして，発言の内容から分かるように，彼はこうした活動にユーフォリアを感じていることがいえる。

4.3　活性隊における対面的相互行為と「まちづくり」

以上のM氏とT氏の語りから，活性隊において，定例会や「トキサイ」における対面的相互行為のなかに，「出会い」として位置付けられる場面があること，そして，両者はこれらの「出会い」のなかで，ユーフォリックな気分を感じていることが明らかになった。

しかしながら，こうした活性隊の現状は，まちづくり研究者および専門家と称される人たちから，「まちづくり」に該当しない事例と判断される可能性が高い。というのも，活性隊の活動は，今のところ，地域における様々な立場の市民の協働によって，常盤平という地域の，多くの市民に共通する具体的な生活上の課題を解決したり，居住環境を向上させたりしているとは言い難いからである。つまり，「公約的価値」の実現がまだなされていないということである。ちなみに活性隊のなかでも，副隊長のE氏は，一般住民や自治会，行政などを交えた「協働のまちづくり」に大いにこだわっている。そしてE氏は，協働のまちづくりを進めることによって「全国区で通じる」魅力あるまちをつくることができるのは，松戸市内では「常盤平ぐらい」だという想いから，活性隊の活動にも積極的に関わっている[10)]。だが，E氏の想いが現実化しそうな気配は，今のところない[11)]。こうした現状から，「公約的価値」を重視するまちづくりの研究者・専門家は，常盤平地域活性隊を，「まちづくりの事例として取り上げる価値がない」と評価してもおかしくないものと思われる。

しかし，活性隊は「トキサイ」というイベントを通じて，常盤平という地域に多少なりとも賑わいを創出している。時期にもよるが，「トキサイ」にはかなり多くの人が集まっており，それ故，常盤平の住民にもそれなりに注目されていることがいえる。したがって，常盤平地域活性隊は，常盤平という地域に対して「良い」と思われる働きかけはできており，その意味では，まちづくりに成功しているといえるのである。

また，本稿で取り上げたキー・パーソンの語りからは，彼らが活動における「楽しさ」を大いに重視していることが分かる。同じ地域（市区町村，あるいは小地域のレベル）に住んでいながら，通常は顔

を合わせることのない個々人が一か所に集まり，通常の地位・役割を超えて，その場限りの共同的な作業を行うことで人間関係が広がり，さらに個々人のユーフォリアが創出される可能性があるというのは，「個人的価値」の側面からみて，とても意義のあることである。加えて，ボランタリーなまちづくりの場合，メンバーにとってのユーフォリアが持続しなければ，活動自体が持続せず，「公約的価値」を実現する機会そのものを喪失する可能性が高い。ゆえに，対面的相互行為のレベルから，まちづくりの活動場面を記述ならびに分析し，参加者に「楽しさ」や「居心地の良さ」といった「個人的価値」をもたらす要素を明らかにしていくことが必要となるのである。

では，まちづくりにおける対面的相互行為を「出会い」としてとらえた場合に，どのようなことが仮説的に示唆されるのか。また，新たにどのような研究課題が成立するのか。この点について，次章で提示することにしたい。

5. 新たな課題

今回取り上げた「常盤平地域活性隊」が，すべてのまちづくりの事例に当てはめられるかどうかについては，多くの研究が必要であろう。しかし，この事例を通じて，まちづくりの活動に普段は顔を合わせる機会のない地域の人たちがボランタリーに集まり，その場で共同的な作業を行うことで，「焦点の定まった相互行為」としての「出会い」が生起すること，そして，そこでのリアリティが参加者の性向と合致するならば，彼らのユーフォリアが醸成される側面があり得ることを提示した。

その「出会い」であるが，同じまちづくりの活動および団体であったとしても，活動メンバーは各々，一つあるいは複数の，焦点の異なる「出会い」に楽しさを見出している可能性があることを，仮説的に提示することができる。というのも，本稿で取り上げた二つの語りは，「活性隊」の隊長と副隊長というリーダー格の人物による語りではあるものの，両者がユーフォリアを感じている「出会い」として取り上げた場面には違いがあったからである。このことは，他のメンバー（隊員）はさらに異なる「出会い」のなかからユーフォリアを見出している可能性を示唆するものである。

そして，もし各メンバーが活動内の異なる「出会い」にユーフォリアを見出しているならば，「出会い」のなかで各メンバーが自ら積極的に動くという意味で，まちづくりが活性化する可能性がある一方で，まちづくりの目標や活動内容に一貫性を持たせる上ではマイナスに働く可能性があることも，仮説的に提示することができる。

最後に，上記の可能性を検証するために必要な今後の研究課題を，3つほど提示しておくことにする。

第一に，まちづくりに参加する人たちが，その活動のなかのどのような「出会い」に，何ゆえに意味を見出しているのかを明らかにする必要がある。個人が「出会い」に対してユーフォリアを感じるのは，基本的に，個人がその場面で引き受ける役割行動と，その個人の自己アイデンティティとの距離が密接になっている，言い換えると，個人が役割にのめり込んだ状態になっているからだといえる（佐藤，1985: 211–213）。したがって，特定のまちづくり活動に参加している個々人を対象に，その相互行為の場面で感じている「楽しさ」や「居心地のよさ」といったものの内実を，その個人の生活構造（家庭・職場といった生活上の各場面と，そこでの地位・役割のセット）やアイデンティティなどと関連づけて解明し，個々人がまちづくりに自ら継続的に参加しようとする条件を探る必要がある[12)]。

第二に，まちづくりの活動場面のなかで，相互行為の秩序がいかにして「出会い」を通じて持続されるのかを解明することである。参加者のユーフォリアや居心地のよさといったものが「出会い」のなか

で持続するためには，外部の世界とは異なる現場に固有のリアリティ，それも参加者にとって心地のいいものとして感じられるようなリアリティが生起し，維持されなければならない。そのために，「出会い」においては相互行為のなかで取り扱われる事柄に暗黙の制限があり，外部の世界における諸属性を無視したり変形して取り込んだりするルール（無関係のルールと変形ルール）があるのであるが，しかし，こうして外部とのあいだに一種の「膜」を貼ることによって辛うじてつくられた「出会い」の世界は，ふとしたきっかけで壊れかねないという脆さも抱えている[13)]。ゆえに，まちづくりの場面において生起する「出会い」の固有のリアリティを生成・維持し，参加者のユーフォリアを維持するためには，各参加者，なかでもキー・パーソンにあたる人たちが適切に「フレーム調整（frame alignment）」（Snow et al., 1986）をし，現場の状況定義を管理する必要が生じてくる。したがって，それがどのようになされているのかを記述し，分析する必要がある。

そして第三に，まちづくりのフォーマル化と「出会い」における固有のリアリティとの関係を明らかにする必要がある。まちづくりに関わる人たちの集まりが目標とそれを達成するための方策を明確にすると，その活動は多くの場合，規則やメンバーの役割を明確化したり，NPO法人化するなどの，よりフォーマルな組織を形成する方向へと進むものと思われる。また，行政組織などのフォーマルな組織とも連携をとるようになる可能性も無視できない[14)]。そうすると，まちづくりの組織は社会的な信用性や資金調達の面などで，より優位に立つことができる一方で，活動内容が，フォーマル組織のもつ意向や規則などによって制約される可能性が大きくなる。そうすると，「出会い」としての対面的相互行為の場面にも，こうした形式的なルールが滑り込み，「楽しさ」や「居心地のよさ」といったものがスポイルされる可能性がでてくる[15)]。つまり，組織のフォーマル化とともに，「出会い」のなかでジレンマが生じることになる。このようなことが生じているとするならば，この問題を克服するために，いかなる手段があるのかを検討することが，課題となるだろう。

注

1) 例えば，都市プランナーとして長年活躍し，まちづくりに関して多くの論考を寄せてきた田村明（1997; 1999; 2005など）は，まちづくりを「一定の地域に住む人々が，自分たちの生活を支え，便利に，より人間らしく生活してゆくための共同の場を如何につくるかということ」として定義し，「その共同の場こそが『まち』である」としている（田村，1987: 52–53）。また佐藤滋（日本建築学会）は，「まちづくりとは，地域社会に存在する資源を基礎として，多様な主体が連携・協力して，身近な居住環境を漸進的に改善し，まちの活力と魅力を高め，『生活の質の向上』を実現するための一連の持続的な活動である」（佐藤，2004: 3）と定義している。一方，社会学者としてまちづくりの研究を行ってきた松野弘（1997; 2000; 2004など）は，まちづくりを「地域社会の主体である地域市民（生活者市民・企業市民・行政市民）が市民的公共性を価値基盤として，暮らしやすく，快適な地域づくりのために行なう，創造的・協働的な活動」（松野，2000: 164）と定義している。「まちづくり」の言葉の定義については，多くの論者がそれぞれの言葉で語っているため，それらすべてを網羅することはできないものの，概ね，本稿で言うところの「公約的価値」にあたる意味内容が含まれているとみて差し支えない。
2) 本稿で想定している「公約的価値」と，「公共性（公共圏）」の違いについて触れておきたい。前者は，多くの市民が共通して「良い」と考えるような状態のことを想定しているのに対し，後者は，そうした「良い」状態とは何かを見出すために市民が自由に参加し，討論することのできる社会的空間を想定している。
3) 筆者は，2008年2月から常盤平地域活性隊の現場に入り，「トキサイ」や「定例会」などの行事への参与観察や，関係者への聞き取り調査を続けてきた。
4) 金ヶ作地区において，公団が常盤平団地およびその周辺の分譲宅地を開発し，入居が始まるまでの詳しい経緯については，松戸市立博物館編（2000）を参照。

5) 常盤平団地自治会による住民運動や，「孤独死ゼロ作戦」に関する詳しい経緯については，大山真人（2008）を参照。
6) 常盤平団地を含む，UR所有の団地の建て替え等の方針については，「UR賃貸住宅ストック再生・再編方針について」（http://www.ur-net.go.jp/stock/）を参照。
7) ここで，M氏とE氏そしてT氏のプロフィールを簡単に紹介しておきたい。
「隊長」のM氏は，1954年に富山県生まれたが，育ちは東京である。1978年に大学を卒業した後，某大手電機メーカー関連の電設工事の会社に入社し，放送関係の設備工事のために全国各地を飛び回っていた。その後，アフリカ（リベリア）に行き，さらにその後，1987年にアメリカに渡った。以後，2005年まで，途中会社を辞めてソフト会社を立ち上げるという経験をしながら18年間アメリカで生活していた。またM氏は1985年に，千葉県柏市に家を購入し，現在もここで暮らしている。M氏が常盤平中央商店街で現在のパソコン関係の店を開いたのは，2005年末である。なお，ここで店を開いた理由は，「たまたま乗った電車のなかに，『あなたも公団の商店でお店をやってみませんか』という広告を見て」，探したところ偶然，常盤平に空き店舗があり，しかもすぐに店舗をオープンできるような内装が整えられていたことが理由である。したがってM氏は，つい最近まで，常盤平とは何の縁もなかった人物であることがいえる。しかし，M氏は現在，活性隊の隊長として，ムードメーカー的な役回りや，中央広場などの場所を「トキサイ」のために使えるように手配したりする役割を積極的に担っている。（2008年3月18日のM氏に対する聞き取りにより確認）
「副隊長」のE氏は，1955年生まれで，生まれも育ちも松戸市八ヶ崎（常盤平からは少し離れている）である。E氏は当初，松戸市内の建設会社に勤めていたが，1989年に辞めて家業の仕事をするようになった。彼の家はもともと兼業農家で，かつ不動産管理も行っている。E氏は1992年に松戸青年会議所に入り，それがきっかけでまちづくりに大変熱心に取り組むようになった。例えば，協働のまちづくりについて，市民，住民団体，役所，企業が話し合う場としての「松戸まちづくり連絡協議会」や，江戸川の河川敷にある地下浄水施設上の土地（土壌で覆われた更地）に花を植えて育てることで景観をよくする活動をしている「江戸川松戸フラワーライン」は，彼がつくった組織である。E氏は，「全国区で通用する」まちづくりができるのは，松戸では常盤平しかないということで，常盤平でのまちづくりを始めるようになった。（2008年6月9日のE氏に対する聞き取りにより確認）
同じく「副隊長」のT氏は，1956年，葛飾区の生まれである。4歳の頃，現在住んでいる場所（常盤平にある，公団が分譲した一戸建て住宅）で生活をはじめている。1984年より，住居の場所を設計事務所として登録し，開設した。同時に，松戸青年会議所にも入会し，40歳の「卒業」の年まで続けた。そこで，まちづくりの活動に熱心に取り組むE氏とも知り合いになり，彼からの影響も受けている。なお，T氏が活性隊に加わることになったのは，M氏とE氏が，江戸川河川敷にて開催されたフェスティバルでT氏が音楽の演奏をしていたのを聞きに行って口説いたのがきっかけである。（2008年3月18日のT氏夫妻に対する聞き取りにより確認）
8) 活性隊は，会を運営するというよりも，集まった人たちが楽しく活動することを最優先しているところに大きな特徴がある。筆者は，活性隊のこうした特徴が，本研究の課題にとっては適していると判断したため，この活動の現場をフィールドにした次第である。したがって，筆者はもともと，「団地」に関心があってこの現場に入ったのではないということをお断りしておきたい。
9) ここで書かれている内容は，2008年3月18日のM氏に対する聞き取りと，同年6月9日のE氏に対する聞き取りにより確認。
10) この文章の内容は，2008年6月9日のE氏に対する聞き取りにより確認。
11) 活性隊が結成された当初は，E氏の働きかけによって，常盤平団地自治会と常盤平中央商店街のメンバーらが，行政も交えて，これからの常盤平のまちづくりについて勉強しようという機運になっていた。しかし，これらのメンバーの中のある人物が突然，活性隊の活動を「妨害」する行動をとったため，この勉強会は立ち消えの状態になっている。現在，活性隊は，団地自治会や中央商店街との関わりがほとんどない状況のなかで運営されている。（2008年6月9日のE氏に対する聞き取りにより確認）
12) 「出会い」を役割と自己アイデンティティとの距離の問題として考えるならば，まちづくりに個々人が自発的に，継続して参加する条件を探究するにあたっては，「役割アイデンティティ論」（McCall & Simmons, 1978; 片桐，2000; 2006など）の視点が有効になってくるものと思われる。また，その際には，ボランタリズム論における行為者のボランタリー・アクションに関する研究（佐藤，1982; 1991; 1996など）のなかに，役割アイデンティ

ティ論的な視点と，相互行為の場としての「出会い」概念を組み込む作業を行う必要があるものと思われる。

13) この点に関して，ゴッフマンは次のように述べている。「対面的相互行為において状況の定義を相互に維持する過程は，関連および無関連のルールによって社会的に組織される。没入することを管理するこれらのルールは社会生活では実質的でない要素，すなわち，丁寧さ，作法，礼儀というような事柄であるように見える。しかし，われわれがリアリティをしっかりと実感することができるのは，外部の世界の揺るぎない性格によっているのではなく，まさにこれらのもろいルールによっているのである。ある状況のなかで居心地良くいられるということは，これらのルールに適切に従っているということによる」（Goffman, 1961=1985: 80）。

14) 活性隊は，結成されてからしばらくのあいだ，会則はつくっていなかったが，2009年春に会則がつくられた。加えて，2010年4月からは，松戸市との協働事業で，各回ごとに色々な分野の講師を呼んで講座を開き，学習と同時に世代間交流ができる場をつくろうという「トキ塾」の活動が始まった。活性隊も，活動が定着するにつれてフォーマル化が進みつつあるといえる。

15) 高橋英博（1998）は，伝統的な建物が多く残る大阪市平野区平野地区においてまちづくりの活動を行っているボランタリー・アソシエーションのメンバーを対象に質問紙調査を行い，メンバーの参加動機として，過半数の人が「自分が楽しいから」と答えていることを明らかにした。その一方で，このアソシエーションが町内会など既存の地域団体と関わらないようにしていることや，活動上の困難として「資金」をあげる人が多いにもかかわらず，行政からの活動助成については「制約が大きくなる」「煩雑」などの理由で禁欲していることも明らかになった。この結果から高橋は，渡戸一郎（1990）が提唱するような，ボランタリズムから既存の地域原理への連接や再賦活の困難性を指摘しているが，本研究の課題からすれば，行政などと接点を持つことが制約を増やすことにつながると受け取られている事実そのものが興味深い。

文献

延藤安弘，1990，『まちづくり読本―「こんな町に住みたいナ」―』晶文社。

Goffman, E., 1961, *Encounters: Two Studies in the Sociology of Interaction*, The Bobbs-Merrill Company.（= 1985, 佐藤毅・折橋徹彦訳『出会い―相互行為の社会学―』誠信書房。）

Goffman, E., 1963, *Behavior in Public Places: Notes on the Social Organization of Gatherings*, The Free Press.（= 1980，丸木恵祐・本名信行訳『集まりの構造―新しい日常行動論を求めて―』誠信書房。）

花田達郎，1996，『公共圏という名の社会空間―公共圏，メディア，市民社会―』木鐸社。

片桐雅隆，2000，『自己と「語り」の社会学―構築主義的展開―』世界思想社。

片桐雅隆，2006，『認知社会学の構想―カテゴリー・自己・社会―』世界思想社。

松戸市立博物館編，2000，『企画展　戦後松戸の生活革新―新しい暮らし方へのあこがれ―』松戸市立博物館。

松野弘，1997，『現代地域社会論の展開―新しい地域社会形成とまちづくりの役割―』ぎょうせい。

松野弘，2000，「まちづくり／むらおこし」地域社会学会編『キーワード地域社会学』ハーベスト社：164–165。

松野弘，2004，『地域社会形成の思想と論理―参加・協働・自治―』ミネルヴァ書房。

McCall, J.G. & J.L. Simmons, 1978, *Identities and Interactions*, Free Press.

大山真人，2008，『団地が死んでいく』平凡社。

佐藤滋，2004，「まちづくりとは何か―その原理と目標―」日本建築学会編『まちづくりの方法』丸善：2-11。

佐藤毅，1985，「初期ゴッフマンとその自己論」E。ゴッフマン／佐藤・折橋訳，1985，『出会い―相互行為の社会学―』誠信書房：199–237

佐藤慶幸，1982，『アソシエーションの社会学―行為論の展開―』早稲田大学出版部。

佐藤慶幸，1991，『生活世界と対話の理論』文眞堂。

佐藤慶幸，1996，『女性と生活世界の社会学―生活クラブからのメッセージ―』文眞堂。

Simmel, G., 1917, *Grundfragen der Soziologie. Individuum und Gesellscaft*, Sammlung Goschen, Walter de Gruyter.（= 1966，阿閉吉男訳『社会学の根本問題』世界思想社；1979，清水幾太郎訳『社会学の根本問題』岩波書店；2004，居安正訳『社会学の根本問題―個人と社会―』世界思想社。）

Snow, D.A., E.B. Rochford, Jr., S.K. Worden, and R.D. Benford, 1986, “Frame Alignment and Mobilization,” *American Sociological Review*, 51(4).

高橋英博，1998，「コミュニティ形成における都市ボランタリズムと地域団体―大阪市平野地区の事例より―」『宮

城学院女子大学研究論文集』88：33–56。
田村明，1987,『まちづくりの発想』岩波書店。
田村明，1999,『まちづくりの実践』岩波書店。
田村明，2005,『まちづくりと景観』岩波書店。
渡戸一郎，1990,「都市ボランタリズムとコミュニティ」日本地方自治学会編『広域行政と府県』敬文堂：187–206。